

# 保育者を目指す学生の「メディア」に対する意識の変化 - 「子どもとメディア」における講義内調査結果から -

著者	藤重 育子
雑誌名	東邦学誌
巻	42
号	2
ページ	101-106
発行年	2013-12-10
URL	<a href="http://doi.org/10.20728/00000322">http://doi.org/10.20728/00000322</a>

保育者を目指す学生の「メディア」に対する意識の変化  
— 「子どもとメディア」における講義内調査結果から —

藤 重 育 子

愛知東邦大学

# 保育者を目指す学生の「メディア」に対する意識の変化 — 「子どもとメディア」における講義内調査結果から —

藤 重 育 子

## 目次

1. 目的
2. 方法
  - (1) 対象者
  - (2) 調査方法
3. 結果と考察
  - (1) 授業前後に調査した「愛教大コンピュータ不安尺度」の結果
  - (2) 「コンピュータ不安尺度」と「ゆとり（感）尺度」「価値志向性尺度」との関連

## 1. 目的

情報があふれている現代において、子どもの動きや教育保育内容にも変化が見られている。芝野ら（2008）は、「動く絵本」を用いて、情報化社会における新しい保育スタイルの確立について考察している。これまでの紙媒体での文化財に加え、新たな絵本の可能性を示唆している。また、森田（2002）によると、パソコンを使用することによって、一人遊びになると解釈してしまいがちであるが、実際の現場では「幼児が2人で遊びながら、協力し合うことや教え合うこと、情報を共有する楽しさなどを見出している」点を明らかにしている。そして、実際に保育においてパソコンを導入した事例を確認しなければ、多くの保育者に実情は異なることは理解されにくい点が指摘されている。森田（2008）はさらに、ICT利用は幼稚園教諭には園務情報化や教材の発展的な利用などに、幼児期の子どもには科学教育の促進や情報メディアへの親和性の形成などを示唆している。

それに伴って、おたよりをはじめとする情報提供の形にも変化が見られている。インターネットを介して「Webおたより」および「メールおたより」を配信する仕組みを提案している堀川ら（2009）の研究によると、幼稚園においてインターネットを用いた子育て支援を行うことによって、保育者・保護者の情報共有、育児不安の緩和、育児参加の促進、以上の3点において効果があることを明らかにしている。また保護者のニーズとして、普段知ることが困難な園内の様子、園・クラスからの連絡および直近の行事予定の情報配信を希望する回答が多いことを示し、これまでの紙媒体に加え、電子媒体のおたよりなどの必要性を提唱している。インターネットを用いた幼稚園と家庭の連携システムに関して松河ら（2002）は、言語能力がまだ十分に発達していな

い幼児を持つ保護者にとって、幼稚園での活動の内容を子どもから正確に聞き出すことが困難であること、そうした保護者に対して、日々の幼稚園での活動を写真と文章で伝えることが有効であることを論じている。また写真を媒介として子どもとの会話が促進される可能性が保護者によって指摘されており、子どもにとっての幼稚園と家庭の連続性を高めるために重要なやり取りが行われていることが示唆されている。さらに浅井（2010）は、従来のおたよりのように一方的な情報発信ではなく、保護者と幼稚園の双方向で情報発信が手軽に行えるコミュニケーションツールの導入が望まれているとして、幼稚園にあるインターネット環境と保護者の方へ広く普及しているPC及び携帯電話を利用したおたより配信システム「インターネット」おたよりを構築した。その成果として保護者へ園児の様子をこまめに伝えることができ、幼稚園及び保護者間のコミュニケーションの円滑化につなげることができる。また保育者の個々にかかるおたより作成の負荷を軽減させ、複数の保育者による共同作業を実現できる、などが利点として挙げられている。

以上のことから保育者養成校においては、教育内容を精査する必要性が生じる。森田（2002）によると、2000年の教育職員免許法の改定に伴い、幼稚園教諭免許取得のために「情報機器の操作及び情報教育」が必修科目に加わったことにより、これからの保育者に情報社会への理解が求められることや、今後パソコン利用の可能性が注目されていることを示唆している。幼稚園教諭を志望する大学生を対象とした情報教育のあり方などについて検討した研究（森田，2008）では幼稚園教員養成課程においてICTの教育利用を促進するための教育内容として、全ての学生が安心して利用できる能力を確実に育てていくこと、基礎教養の充実と共に可能な限り教育現場を想定した実用性を伝えていくことの2点を述べている。また、保育学生とメディアリテラシーに関する研究では八木（2012）が考察において、「メディアとの付き合い方」について「親の躰」「きょうだい関係」「友人関係」「ルールを守る」などの記述を含ませている。

そこで本論文では、これらの情報を得た上で、これまでに取り上げられていた学生のメディアに対する意識と2013年度前期開講科目「子どもとメディア」を受講する学生との、差異に着目し実態を調査するとともに、さらに多角的な尺度から質問紙調査を行い、メディアに関係する保育者に必要な資質を考察したい。

## 2. 方法

### (1) 対象者

対象はタイトルに記した通り、保育者を指す「子どもとメディア」を履修した8名である。その中から受講した5名に関して、今回の分析対象とする。5名は全員が4年生であり、その内訳は男子学生1名・女子学生4名であった。

### (2) 調査方法

前述したように保育現場においては、メディアの多様化と保護者の要求などに伴い、メディアを使いこなす能力をはじめ、適切な手段で自分の考えを伝達する能力、情報を取捨選択する能力などのメディアリテラシーを身に付けることが必至であろう。まずは、八木（2012）の調査にお

いて用いられていたコンピュータ不安の面から探る。さらに様々な尺度を使用して、それぞれの関連について分析する。

全15回講義内において、授業の前半に「愛教大コンピュータ不安尺度」を用いた質問紙調査を、授業最終日に「愛教大コンピュータ不安尺度」と「ゆとり（感）尺度」「価値志向性尺度」の一部を用いた質問紙調査を行った。質問紙に使用した尺度に関しては、次に示す。

#### 1) 愛教大コンピュータ不安尺度

平田（1990）によると、コンピュータ不安とは「一般にコンピュータと接触するとき、コンピュータとの接触へと導く何かをするとき、あるいはコンピュータ利用の意味について考えたりするとき個人の内に喚起される不安ないし憂慮」と定義され、「教育的視点からみれば、それは教育上の配慮によって除去ないし低下させうる可能性をもつもの」とされている。愛教大コンピュータ不安尺度は3つの下位概念から構成されており、コンピュータ操作時の緊張や不安である「オペレーション不安」、コンピュータの学習意欲を中心とする「近接願望」、コンピュータ・テクノロジーの社会的影響を懸念する「テクノロジー不安」と名付けられている。質問項目は全21問であり、下位尺度は各7問ずつから成る。

#### 2) ゆとり（感）尺度

古川ら（1993）によると、従来、労働・行政・経済の領域で自明の概念として扱われてきた「ゆとり」が単に自由時間や経済的豊かさと同義ではないことを実証的に明らかにし、多次元的な測定を可能にしたことに意義がある。質問項目は全50問であり8因子から成る実際のゆとり（感）尺度は、7件法で回答を求めている。しかしながら今回は、交友関係や人生についてたずねる9問から成る第一因子「遊楽性」と、将来や挑戦することについてたずねる7問から成る第三因子「挑戦性」から選択した16問を質問紙に組み込んでいる。

#### 3) 価値志向性尺度

酒井ら（1998）によると、6種の普遍的価値（理論・経済・美・宗教・社会・権力）を個人がどの程度志向し、体験しているかを測定する尺度である。質問項目は全72問であり6因子から成る。しかしながら今回は、他者との関係性やその親密さについてたずねる12問から成る第五因子「社会」を質問紙に組み込んでいる。

全ての質問項目において、1：「あてはまらない（そう思わない）」から5：「あてはまる（そう思う）」の5件法でたずねた。

### 3. 結果と考察

#### (1) 授業前後に調査した「愛教大コンピュータ不安尺度」の結果

結果を表1に示す。変化が見られるよう、上段の結果は平田（1990）と八木（2012）の先行研究より引用し、今回の授業前後調査における結果は下段に示した。

総合得点から見受けられる限り、年月を経て徐々にコンピュータ不安が減少している様子がわかる。授業前後においても、この数年の結果と比較すると総合平均得点が減少している。これは、

実際の受講者が少人数であったことや、教員と学生または学生同士が普段からコミュニケーションの取れている関係性であったことも関連しているだろう。また選択科目であり、受講者にはもともとコンピュータの知識や技術がある程度身に付いており、不安要素が少ない状態で受講した可能性がある。さらに、カリキュラム上4年生対象の科目であったため、ある程度のコンピュータ操作はこれまでに行ってきており、過年度においてレポートなどをコンピュータで作成した経験もある。

表 1. コンピュータ不安尺度の平均得点

	総合	オペレーション不安	近接願望	テクノロジー不安
1998年調査(平田)	60.6	18.3	21.6	20.7
2010年調査(八木)	60.2	17.7	22.3	20.1
2013年授業前	52.4	16.6	17.2	18.6
2013年授業後	56.2	16.2	20.6	19.4

次に、3つの下位尺度について触れる。オペレーション不安に関しては、学習前後において大きな差は見られなかった。しかしながら15回の学習を終えた平均得点は16.2点であったものの、学生ごとの得点に13点から21点の幅が生じた。森田（2008）は、現代の学生であれば幼少期より様々な情報メディアに囲まれて育ってきていることから、年齢が高い世代と比較して、不安や抵抗感は少ないと想定されるように分析しているが、数字を見る限り全員にあてはまるとは言い難い。今後その個人差は広がる一方であることも推測できる。近接願望に関しては、授業後に2.6点増加していることから、コンピュータに対してより親近感を持つことができたと理解できる。またそれは、授業内容として、課題が多く出されたことから、課題の達成状況にも左右されるであろう。テクノロジー不安に関しては、15回の学習を終えた平均得点はわずかではあるが、平均得点が増加しており、予測とは異なる結果となった。テクノロジー不安とは前述したようにコンピュータによる社会的影響に対しての不安をたずねる項目であるため、コンピュータを使用する同時期または使用した後のことに目を向ける必要が生じる。多少の不安を取り除くことで、彼らのメディアリテラシーを上げることにもつながるだろう。しかしながら、堀川ら（2009）や浅井ら（2010）の先行研究におけるコンピュータを使用したシステムの構築や運用を見る限り、簡便さなどに主張が集まるが、危険が伴うことはあまり重視されていない。その点、今回の調査からは授業内容を通して、個人個人で危険や不安を受け止めながら向き合う様子がうかがえた。そのため、以上の全ての項目において不安が減少することが望ましいかどうかについては疑問であり、コンピュータを使用する者が危険を予知したり把握する力を持ち備えたりすること、そしてその対策についても考える必要性もある。

(2) 「コンピュータ不安尺度」と「ゆとり（感）尺度」「価値志向性尺度」との関連

授業後に調査した、それぞれの尺度得点を表2（A～Eは学生）に示す。なお、表中の数字について平均得点よりも高いものを斜字で、今回着目する学生B・Eについては太字で記した。

結果としては、「コンピュータ不安尺度」総合得点においては平均より4名（A・B・C・D）が高く、「ゆとり（感）尺度『遊楽性』」においては平均より3名（B・C・D）が高く、「ゆとり（感）尺度『挑戦性』」においては平均より3名（A・B・D）が高く、「価値志向性尺度『社会』」においては平均より3名（A・B・C）が高かった。

まず、学生Bに着目して分析を行う。コンピュータ不安尺度に関しては、平均得点よりもやや高い値ではあるが、その他3尺度全てにおいて平均得点を上回っている。このことから、コンピュータを使用することに対して不安を受け止めた上で、コンピュータを使用した課題をこなすためには、周囲との関係性を良好にして、助言などから回答を導くことなどが重要であることを示している。適度なストレスや不快を与えることで、予想以上の結果が出るように、コンピュータに対してある程度の不安があっても、一人でやる作業でなければ良い方向に導き出せるようになるという解釈ができる。先行研究でも明らかとなっているように、保育現場においては、複数名で教育や保育にあたるため、互いに補い合う必要性が生じる。表2から読み取れるように、コンピュータ不安尺度の平均得点よりも高い他の3名（A・C・D）に関しても、その他3尺度のうち、2尺度以上で、平均よりも高い値を示している。

表2. コンピュータ不安とその他3尺度との関連

	コンピュータ不安 総合(授業後)	ゆとり感 「遊楽性」	ゆとり感 「挑戦性」	価値志向性 「社会」
A	65	3.4	3.3	3.8
B	<b>59</b>	<b>4.0</b>	<b>3.4</b>	<b>4.2</b>
C	58	4.1	2.9	3.7
D	57	3.6	3.3	3.0
E	42	2.3	1.7	3.5
平均	56.2	3.5	2.9	3.6

次に学生Eに関しては、コンピュータ不安が低いということはつまり、普段からコンピュータに慣れ親しんでいる様子が容易に想像できる。交友関係や他者との親密性において低い得点であったこと、そして将来について考えることや挑戦する姿勢などにおいては、平均得点より下回っている値であることから、目標を高く掲げるなどの他者の助言や本人の気づきに結びつく行動をさせることが必要になってくる。あるいは、学生Eへの他者からのアプローチにおいて、本人が中心となった行動パターンに変化する可能性も考えられる。

今や保育現場において家庭に対して情報提供をするにあたり、コンピュータの存在が欠かせない。その際に、不安要素があるためコンピュータを積極的に使用しないのではなく、周囲の保育者にたずねながら、挑戦する姿勢というのは大切である。その点においては、学生Bの事例のように、学生本人の努力と養成側の理解が必要であろう。

今回は、調査対象が少なく偏りのある結果であるとともに、一事例にすぎないかもしれないという点で反省が残る。今後は、さらに発展するであろう「メディア」関連と子どもの教育保育内

容、さらには養成校で行われている教育内容に関して着目していきたい。

### 【引用文献】

- 浅井勇貴・岡本東・堀川三好・菅原光政 2010 幼稚園を対象とした子育て支援システムの構築と運用 情報処理学会研究報告13巻 pp.1-8
- 古川秀夫・山下京・八木隆一郎 1993 ゆとりの構造 社会心理学研究 9 pp.171-180
- 平田賢一 1990 コンピュータ不安の概念と測定 愛知教育大学研究報告39(教育科学) pp.203-212
- 堀川三好・岡本東・菅原光政 2009 幼稚園を対象としたおたより配信システムの構築とその効果 情報文化学会誌第16巻1号 pp.79-85
- 松河秀哉・今井亜湖 2002 インターネットを用いた幼稚園と家庭の連携システムの開発と評価 日本教育工学雑誌26巻1号 pp.45-53
- 森田健宏 2002 保育所におけるパソコン利用に対する保育士の抱く問題点の検討 日本教育工学雑誌26巻2号 pp.87-94
- 森田健宏 2008 幼児教育場面においてICT活用を促進するための教員養成課程における教育内容に関する検討 日本教育工学雑誌32巻2号 pp.205-213
- 酒井恵子・山口陽弘・久野雅樹 1998 価値志向性尺度における一次元的階層性の検討 - 項目反応理論の適用 - 教育心理学研究46 pp.153-162
- 芝野治郎・木内菜保子 2008 保育者の幼児教育を助けるメディアとしての「動く絵本」の役割 中国学園紀要7巻 pp.101-107
- 八木朋子 2012 保育学生とメディアリテラシー 東邦学誌41巻3号 pp.135-140

受理日 平成25年9月26日